

四時間の音楽になったラブレター ～ 楽劇「トリスタンとイゾルデ」～

《あらかわバイロイト》オペラ監督 田辺とおる

五年目の《あらかわバイロイト》は、「ついに」トリスタンを上演することになりました。

ついに？

もちろんワグナーはどれも大作ばかりです。二〇〇九年のバルシファルに始まり、ニーベルングの指輪からワルキューレ・神々の黄昏・ラインの黄金の順に公演してきました。いわゆる「市民オペラ」という規模の当劇場には、背伸びも良いところ。

トリスタンのオペラ編成・ソロや合唱の数・場面設定の規模などはむしろ、昨年までの諸作よりコンパクトです。上演時間もワグナーとしては中くらいでしょうか。

しかし、精神的な影響が桁違いです。作品について書かれた物や、芸術・文学・哲学などへの引用の多さでも、群を抜いているでしょう。

芝居でもオペラやミュージカルでも、普通はまず登場人物・ストーリー・音楽など、作品の展開をフィクションとして楽しみます。

でもトリスタンに触れた人は、もつと入り込まずにはいられない、自分と置き換えずにはいられないという衝動に駆られるかのようです。

「許されぬからこそ燃える恋」は古今東西かわらぬ命題。心中は、実際には中々できませんがシェークスピアから歌舞伎、小説から刑事ドラマまで、あまたの作品に登場します。もちろんオペラにも。そしてオペラの真骨頂は音楽です。ミュージカルよりもさらに、音のドラマで聴かせる魅力がウリです。その音楽が、トリスタンは破格なのです。トリスタン和音とか無限旋律とか、この作品で創出された技法は後

世に大きな影響を与えましたが、それだから、ではなく兎にも角にも音楽の密度が破格なのであります。

ああ、僕がもつと文学者だったらこういう所で気の利いた形容の一つもしたいのだが、作品に惹き込まれる感触とか、自分の愛や性に重ねてしまう感覚とか、音楽と同化して精神的オルガスムに至る事とか、そういう魅力を描く言葉が見つかりません。「オペラ名曲百科」の永竹由幸先生の言葉を借りてしましましょう。平易な説明ながら僕が学生時代から「そーだそーだ」と繰り返し読んだ名文です。

〃

人妻マティルデ・ヴェーゼンドンクとの不倫の恋が灼熱のごとく燃え上がり、その情熱を総てこの楽劇の中に注ぎ込んで出来上がった奇蹟的な名作。ヴァーグナー自身が自分の筆の先から流れ出ていく素晴らしい音楽に驚いたというが、正に人間業とは思えない芸術作品である。特に第二幕の愛の二重唱は愛の音楽の極致と言われており、一時間近くもかかるこの二重唱は二度のクライマックスとその間の甘美な陶醉の曲からなっており、それはヴァーグナーとマティルデの密会の瞬間の甘美さの芸術的昇華であり、聴く人をしてエクスタシーを感じさせる。愛というものを、特に、非常に直接的に肉欲的な愛というものを、まったく偽善的なオブラートに包まず、しかもこれほどまでに崇高な音楽に書き上げたというのは唯々驚くしかない。

〃

トリスタンの原話は中世以来有名でした。ワグナーに先駆けてオペラにそれが登場したのはドニゼッティ作曲「愛の妙薬」。ドレスデンのオペラ監督時代のワグナーも指揮しています。

その後、市民革命の先頭に立ったかどで国外追放になりスイスに亡命。この政治犯ワグナーを庇護したパトロンが、マティルデの夫です。自宅の近所に住居まで提供した。

ところが恋に落ちたワグナーは、逢引を重ねる中でまずトリスタンの台本を執筆。熱烈な献詩を添えてマティルデに渡す一方、彼女の詩五編に作曲した「ヴェーゼンドンク歌曲集」を完成させます。第五曲「夢」はトリスタン二幕の、あの愛の二重唱の原型です。ワグナーは管弦楽伴奏まで作ってマティルデの誕生日に窓の外から演奏させる念の入れ様。その後ヴェネツィアにひとり旅立ち、彼の地の憂愁の虜になるなかでマティルデに多くのラブレターを送りながら、第二幕は完成しました。旅費は勿論彼女の夫が負担。生涯パトロンを渡り歩いた規格外の人格です。天才だから、でしょうか。

〃

この頃の彼の日記とマティルデへの書簡は歌詞と同じテンションで書かれており、作品そのものがラブレターだと判ります。たとえば・

【日記】「トリスタンの詩が完成した時、私を抱いて『私の望みは全て叶えられた』と貴女は言った。私は生まれ変わった。激したり熱狂したり酔い痴れた気持ちではなく、厳肅で満ち足り、心暖まり自由で未来に目を向ける心地

だった。一人の婦人が苦悩の中に身を投じて、私にこの瞬間を恵んでくれた。かくして貴女は死神の手に委ねられ、私に生命を与えてくれた。貴女と共に世界に別れを告げ苦悩し死ぬために」

【日記】「愛しい人よ、私を愛しても悔いるには及ばない。それは神々しいことなのだから」

【書簡】「第二幕はまだ強く私の心を捉えている。至高の生の炎が赤々と燃え上がり、いまにも私を焼き尽くさんばかりでした。しかしこの炎が幕の終わりで弱まり、死による変容の柔らかな輝きが立ち現れるにつれ、私の心は静まりました。貴女が来てくれたらこの部分をお聞かせしましょう。あとは終わりがうまくいくよう願うばかりです。」

【書簡】「愛しい人よ！このトリスタンは途方もないものになりそうです。この終幕。このオペラが上演禁止になるのではないかと心配です。聴衆は気が変になってしまいうに違いありません。」

【愛の二重唱より】「おお永遠の夜、御前に抱かれ、微笑まれた者は、恐れなしに、目覚められぬ、その不安を払え、優しい、憧れもとめる、愛の死よ、名も呼ばず、別れもせず、新たに知り、新たに燃え、無限に、一つになる、焼けた胸の、この上なき愛の喜びよ！」

【イゾルデの愛の死の結語】「波打つ潮の、高鳴る響きの、世界の息の揺らめく宇宙の中に、溺れ、沈み、我知らず、この上なき喜びよ！」

カタルシス（浄化）に至るとは、まさにこのことでしょう。

